

# 行ってみなきゃわからないドイツ

(2015.9~10)

中間一範

今夏、ひたすらノンビリと足の向くまま無為を楽しむひとときを多く味わってみたいと、2年半越し（前は冬季）でドイツを訪れたが、なぜか飽くことがなく、異文化が今なお新鮮で不思議な感覚である。ここに書き留めたい日常生活面で身近に感じたこと、目にした在り様など徒然なるままに、だらだら拙文で記してみたいと思う。

## ＝ドイツの夏季＝

日本とドイツを比べると、日本では猛暑ありがドイツでは凌ぎやすい冷夏？

ドイツの気温は、それでも時には 30℃ を超す好天が続くこともあり、最近では温暖化の影響なのか場所によっては連日 35 度前後まで上がる日もあり、暑くなっているとのこと。

しかし、湿度が高くないため、風通しの良い木陰では汗ばむことがなく、日によっては真夏でも秋のように涼しい日もあり、特に夜間の外出の際には、急な冷え込みのために長袖類の用意が必要で、寒暖の日差変動が激しいのがドイツの夏で、日中でも街中で見かける夏の服装は、半袖に短パン、長袖に短パン、長袖（中にはジャンパー服）に長ズボンの人達など男女様々<Photo A>である。

一方、暑い日中を乗り切るための昼間の家庭での暑さ対策は、先ず朝起きると家中の全ての窓をしっかりと閉め、日の差す面は、少しでも照り返しの熱を防ぐため、カーテン、ブラインド、シャッターをしっかりと下ろし、日中は、絶対に窓を開けることなく家の中に溜め込んだ冷えた空気、穴熊生活をするようひっそりと暮らす<Photo B>のである。

特に、エアコンを設置していない学校、公共交通機関やほとんどの店内は、さながらサウナ状態になっても、文句も殆ど言わずジッと我慢の子で過ごし、日本と比較すると夏が短く湿気も少なく、7 月を過ぎて8月半ばともなれば更に涼しさが増すドイツでは、装置あるエアコンが活躍する時期は精々一ヶ月くらいで、冷房は一般的ではないというわけである。

ドイツは、地図を見ると北海道より緯度が高く、ほぼ樺太と同じで、西ヨーロッパでは、どんなに猛暑の日でも北海、バルト海からの気候のせい、真夜中から明け方にかけては「高原の涼しさ」になるので、気温に加えて湿度がとにかく低いので日本の暑さほどの不快感はなく、地理的な違いが羨ましい限り、これまでに夜中の寝苦しさは皆無で過ごせることにびっくり。

なお、3月の最終日曜から10月の最終土曜までは、夏時間（日本との時差は7時間）が採用されるため、高緯度地方の特徴で日照時間も長く、朝は5時前から夜の10時近くまで外は明るいままである。

また、ドイツの列車は、ICE（新幹線）とEC（特急）を除いて、市バス、市電、地下鉄（Uバーン）や近距離鉄（Sバーン）にもエアコンの装置が備わっているのは全てではなく、暑い日にエアコン車両に乗り合わせるのは幸運である。

環境破壊に大きく影響するエアコンは、徹底して装備されることはないということで、ここでもエコ対策の一環に寄与の精神がかいま見える。



〈街中での夏の服装様々〉 A  
ジャンパー姿の人が見えましょうか



〈中庭から眺めた日差し面の窓の様子〉 B  
窓を開けることなくシャッターの全下しが大半

## ＝居住形態、入室の仕組み＝

フランクフルトの市街地における居住形は、建物を一体にして内部を複数に区切り、それぞれを独立した住居にして供与するアパート形式の集合住宅が多く、その造りは、東西南北の道路を挟む敷地に口の字で囲むヨーロッパに良く見られる中庭方式（ミニ公園や子供の遊具施設を配した遊び場が多い）が一般的で、大概を5～6階建て（地下は駐車場）にして高さが軒並みそろい、持ち家、賃貸様々で、最近日本の大都市に多い住居主体の高層えんぴつビルの林立は見当たらない、何処へ行っても統一された景観を醸し出している。

日本でマンション(アパートが転じた和製英語名)に頻繁に登場する「〇〇ハイツ」のハイツは、英語で高台にある家、「〇〇ハイム」のハイムは、ドイツ語で単に家という意味で、当地集合住宅の建物には名称はなく、その地域名が街路板に標されていて、郵便物は、都市名と地域街路板に後述の建物仕切り付番を記して届き、サインが必要な物は、部屋番がないので、フロアーをインターホン越しに伝えて、戸別の玄関で受け取る。

各住居への出入りは、歩道に面して建物一体が、ブロック別に上層へ縦割り（ブロック1フロア3住戸が多い）別に色分けして仕切番が付してあり、歩道からダイレクトに1階キー差しの扉開錠で入るとそのまま自動で閉まり、内有的階段かエレベーター(EV)利用（あたりは暗いのでEV前の照明ボタンを押して点灯後は自動消灯）で、各フロア戸別玄関のキー差して扉開錠し部屋へ入るホテルと同じ仕組みで、扉を開けて玄関ホール無しの即廊下で下足するつくり。中庭からも同様でブロック別に入ることができて、特にドイツの主婦は、勤めなど外出で留守する家庭が多く、登下校の学童を含めて、当然のことながらキー持参が必携で、誰かが在宅ありでは戸別のインターホンで確認（日本の室番コール操作と違い、ドイツは戸別にネーム直結）し合って入室する。

なお、各家庭の光熱のことに触れると、部屋の明かりは各室とも調光式で全開でも暗いため、必要最小限のスポットライトを多用し、台所のコンロ、食器洗い機、洗濯機類（シーツ類は乾燥機で、その他は窓際やバルコニーで可動式の物干ラック）はオール電化で、給湯、シャワー、暖房設備（放熱式が多い）は地下室からの電力温熱源で、ガスや石油利用は一切なし、水道は山や川が少ないため地下水から供給され、光熱一つを見てもエネルギー省力化の精神がうかがえる。

## ＝多種多様な交通の仕組み、利用者への情報の伝達＝

ここフランクフルトの交通網であるが、後述の市内域網①（25km圏相当ぐらいか）は、地下鉄（Uバーン8系統）と近距離鉄（Sバー9系統）は中央駅を絡めた南駅を起点にして、郊外地では地上鉄としたつくりで、これらを取り囲む形で市電<トラム>（T21系統）と市バス（B62系統）がネット状に路線が豊富で、特にS発着駅は、行き先と途中停車の主要都市名が明示されて旅程の利用策が容易である。

地下鉄 U、近距離鉄 S の駅の行先案内の掲示は、駅入り口に U、S の案内、U ホーム内には各系統の全区間駅名の案内表示（当駅には黄色被せ）〈photo C〉、S 構内にはホームと行き先、発時刻の電光案内、S ホーム内には、入る電車の行き先と途中停車 3～5 駅の電光表示、そして U、S 電車内では、車両別の座席対面方向に行き先と次停車 3～5 駅がミニ表示板（S には到着時刻付）で随時流れるシステムである。

また、トラム T は、停留所では、各系統別の到着予定の電光表示と車内では車両別（T は 3 両編成が多い）の座席対面方向に行き先と次停車 3～5 駅の電光表示が流れ、バス B には座席対面方向に行き先のほか次停車駅での他の系統交通機関と以降次停車 3～5 駅のミニ表示板〈photo D〉が順次案内される。

このようにいずれの交通機関利用時においても車両内や駅構内の字幕、字体はそれほど大きくはないが、要所での利用者への各車内外の交通案内表示板による次駅名、降車駅名や乗換、出口への誘導の仕方、その在り様で察知しやすく、特によく利用したトラムやバス車内では、案内放送と併せて案内表示を見ていれば、外を伺うことなく乗り過ごしの防止にも役に立ち、初乗り系統でもまごつくことなく過ごせた。

一方長距離発着を内蔵する中央駅（24 ホーム）は、ドイツの大都市に向かうベルリン、ハンブルグ、ケルン、ミュンヘンや、隣国ウイーやパリへの ICE 列車がひっきりなしで、発着の様子を観ると、ヨーロッパに多い鉄道止まり折り返し式のせいか、到着列車への利用者は、直ちに乗り込む体様で、ものの 15 分前後で事前場内放送なしで時間発車となり、日本の新幹線が車内清掃時間を挟み、待ち客への案内放送で乗車可とするのとは大違いで、列車自体が窓を含めて汚く、トイレ環境なんかもそのまま気にしないている。

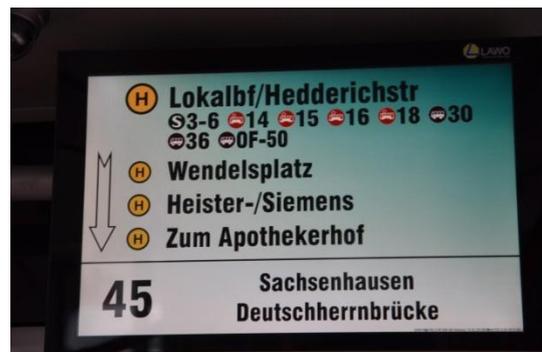
なお各電車、バスへの乗車、降車はボデー外内側面に備え付の押しボタンがあり、完全停車で緑色ランプの点灯ボタンを押すと扉が開き、発車時は運転手が運転席モニター確認で扉を閉める仕組みである。

また、購入したチケット（購入方法は、定期券が DB〈ドイツ鉄道〉旅行案内所窓口で扱う他は各駅、トラム停、バス停に配備された券売機で）は、65 歳以上向け定期券購入でフランクフルト市内域網①をフルに使えて道中を楽しめた逸品。これに倣って、JR と都営鉄や民営鉄がオール一体で役所構図クリアでシステム化して、65 歳以上は電車、バス全路線が東京 23 区内を終日使える 1 か月定期券発行の便宜を計たら、その経済効果や如何に。4 人に一人となったこの年齢人、アクティブシニア達は、一体どのように反応転回するのか、DB が一手に運営管理①圏内 U、S、T、B の多種多様な交通網の仕組み違いからして、ここは愚問やめておこう。



〈駅構内の U バーン系統別案内表示〉 C

当駅の黄色被せに全区間の駅名が表示されていて系統選択、起点終点、利用目的駅が一目瞭然である案内は真上が起点駅、真下が終点駅で、黄色の左側



〈バス内の案内表示板〉 D

真上は次停車駅で次行は利用可の交通機関系統で以下の行は順次向かう停車駅の表示で、S バーンには↓のところの到着時刻が表示され降車駅の用意が

には囲み↓が付してあり、当駅からの行先駅が判る

目にでき、真下は系統番号と行き先方面案内である

## ＝多目的使用が自由自在の歩道敷・軌道敷も信号なしで歩道を兼ねる＝

路上駐車で溢れるドイツの街は、車道・歩道の一角が当たり前。路上駐車帯での特に縦列駐車空き枠への駐車入れの上手さは手慣れていて、歩道上に乗り上げた駐車形は縦列よりは斜め駐車が多く、歩道の確保が狭いところも見かけたが、駐車帯の間隙・空間は大概が見当たらない、車一杯の車王国である。また、徹底された車道・歩道への自転車専用道の配備。道路敷事態の幅が広く、車道内に自転車道、歩道内にも自転車道と並行に整備されたところもありで、歩道内への歩道と自転車道、メイン川両側散歩道の歩道・自転車道もはっきりと区別があり、散歩好き、自転車好き双方の往来時安心して散策できる。

それに広大な歩道敷き内では、ここに占めた食事テラスエリアも良く見られる光景。ドイツ人は朝、昼、夜を問わず外食好きで、特に夕食時は日が暮れるのが遅いので夕映え下で食事する人で溢れている。

一方電車道では、電車の通過の動きの間隙をぬって歩行者が軌道敷を渡る<photo E>のは当たり前。歩道から電停利用の歩きも日常茶飯で、歩行者に対する車の一旦停止の配慮が行き届いている。

なお、よく知られたアウトバーン<自動車専用道の意>のことに触れると、何処に行こうと全域無料。走行は右側走行であるが、最左レーンで追い越ししたら直ちに隣の右レーンに変えて、最左レーンは開けるのが走行行為のルール。日本で追い越し車線での我が道顔を見かけるが、これはご法度も甚だしいこと。

加えて普通乗用車は、当然のことながらドイツ製のベンツ、アウディ、フォルクスワーゲンが大半で日本では見かけないデザイン車が溢れ、トヨタ、日産、ホンダ、三菱、マツダ、スバル、スズキなど少ない中にもこれら日本車を見かけるが、デザインは日本国内で見かけるものとは違うように見える。

## ＝外食・日常の食事、献立＝

先ず外食で大きな違いは、日本食店では、店が違くとメニューが絞られるが、ドイツ食店は、どの店でもメニューが変わらないのが一般的である。

この違いは、日本食店は、和食（丼もの、ご飯にオカズ料理、麺類）、洋食（西洋・中華料理、麺類）と店により献立が多彩で限定料理食もあるのに対して、ドイツ食店は、パンにソーセージやハム、肉類（鶏肉、七面鳥、豚肉、牛肉いづれかのうす切り揚げカツ風シュニッツェルは名物）、ポテト、チーズの盛り合わせ、野菜主体で取り込んだ単純料理食が当たり前のメニューで、日本は食べたい店を選んで、メニューによってはオーダーすると小皿に数品が並び、ドイツは豊富に点在する店内やテラスエリアに飛び込んで、大概何処でも同種一辺倒の定番メニューを大皿一つに小皿一つくらいでオーダーすると、半端じゃないお皿一杯の量の多さを男も女もぺろっと平らげるのが日常外食の在り様で、中にはテイクアウトする人もあり、よくも飽きないものと感心する。

一方お祭り市を覗くと、日本のお祭りといえば、年間行事時で神社境内の限られた一角やそこへ続く道路の片側脇に縦列に並ぶテント張りの出店が一般的で、メニューは焼きそば、ケチャップ添えフランクソーセージ（豚の腸詰めがために作ったもので、ルーツはフランクフルトである由）、モロコシ、たこ焼き類で酒・ビールなしが定番で見られるが、ドイツでは、年末のクリスマス市、適時のボロ市や美術館市などで、旧市街地の広場、広大な歩道敷き、遊覧川散歩道と自転車道（photo F）外の片隅空地の一角にテント可動の出店がにぎやかに並び、店のメニューはドイツ食定番が用意され、勿論ワイン・ビール OK で通常の外食メニューと同様で、簡易テーブル席か歩きながらの手持ち立食で、ここではコップ、皿は返却す

ると戻入され、日暮れ時には一斉に店が閉まり、人は立ち去ってにぎやかさが一変し、あたり一帯は静かにその日が終わる。



〈トラム軌道敷内の歩行者の様子〉 E  
上下線トラム間の合間をぬって乗換で渡り歩く人達  
系統トラム到着予定の電光表示がかすかに見える



〈遊覧川岸の自転車道と散歩道、テラス席〉 F  
自転車道は川辺の色違い路ではっきり分る

また、主要な駅の構内（photo G）に並ぶ店頭には、ハム、ソーセージ、キングサーモン、ニシンなどにチーズ、刻み玉ネギ、トマト、レタスなどがこぼれるように挟んだサンドイッチに飲み物が用意され、朝、昼、夕時といわず買って列車に乗り込む人、勤め先の人、家に持ち帰る人などなど多く見かける光景である。

## ＝ヘルシーフードの日本食＝

10年ぐらい前から、新聞のレストラン案内で、日本料理店の紹介が増えて、日本食の関心が高まってきたようで、ここフランクフルトでも、日本酒を飲みながら、特に人気上位の「すし」をつまむ若いカップルも目立ち、最近では回転すしphoto Hもありで、他日市街を散策中に目にしたラーメン店で、店内を見渡しながら店員に聞いてみると、ここはほとんどが、日本人客であるとの答えであった。

日本料理店では、高級感を出さない肩のこらない雰囲気での店構えで、客を増やすべく人気とりも激しいとか、日本食人気の裏には、物珍しさだけでなく、脂肪分が少なく健康にいいという印象があるようで、実際、若い世代を中心に、大好物の脂っこい肉料理を敬遠するドイツ人が増えてきているのと無関係ではなく、日本人の平均寿命が世界で上位の最大の原因は、食生活にあるらしいということも良く知られている。

一方、これまた数年で飛躍的に増えて、人気が高いアジアマーケット<Photo I>を覗いてみると、日本食品類を扱っているドイツ店には、米、麺類、佃煮、醤油、酢などのほか豆腐、納豆、こんにゃく、もやし、漬物、梅干し、らっきょう、日本茶の類まで、近年ではほとんどが日本国内同様に調達できる。



〈駅構内店頭の様子〉 G  
左側が折返し発着ホーム



〈漢字名の回転すし店〉 H  
内を覗いたら日本人客はいなかった



〈アジアマーケットの店看板〉 I

## ＝飲料水、ワイン、ビール、アイスクリーム＝

飲料水のことに触れると、水道水は石灰質の硬水（日本は軟水）で、各家庭は、生水が飲めないので、普通の水と炭酸入りの水をボトルでまとめ買いし、ストックしておくのが一般的である。それにジュース類やワイン好きの国（マーケットでの買い物バケットにはたいてい入っている）で、食卓には赤ワイン、白ワイン、リンゴワイン、ビールが並び、外食時の注文も料理にワインやビール（小麦を多くの割合で使用して醸造した白ビールが多い）付で老若男女が欠かすことなくよく飲み、ここで水をうっかり注文すると有料で、日本で黙っていても水が必ず運ばれるのとは大違いである。

また、街を歩いていると、よくアイスクリームの店を見かけるが、どこの店頭でも色とりどりで種類が多いのにびっくり。子供から大人まで立ち止まって覗き、好みのアイスクリームを買い、コーヒー付きで買った人は店内や外のテラス席が利用可で、大概の人は歩きながら口にして、子供はともかく大人連中も堂々たるもので、これはよく見られる光景で、拙者も時々買ってく2€口にしたがとても美味しかった。

## ＝生活用品ペーパー類の比較（日本 N、ドイツ D）＝

生活上でよく使用するペーパー類は、トイレトペーパー①、ティッシュ②、キッチンタオル③、携帯用ティッシュ④などが挙げられようが、この中で特に①のサイズ、紙質を比較すると、Nにはシングル、ダブルあるのに対して、Dはシングルのみで、長手幅はNよりDが約1.5cm狭く、紙厚はNよりDが厚めで、ミシン状切り取りはND変わらないのつくり、②のサイズはND変わらないが、紙厚はNよりDが厚いため1枚取り出しで充分が、紙厚が薄いNは2～3枚取り出し?となり、③の幅厚はNよりDが大きめでソフト、④はNよりDの袋が厚めで細長にできていて、①②③④の大小比較、使い勝手はどちらに軍配が挙がるのか、それぞれの単品価格はNDそれほど大差はない。

## ＝外出時のトイレのこと＝

ドイツのトイレは、無料制（公共施設、空港、ホテル、レストラン、カフェ、ショッピングセンター、スーパーマーケットなど）と有料制（鉄道駅構内、大型デパートなど）があり、駅構内で見かけたのは、入口通り抜けバー横へのコイン投入く1€でのバー開錠で入り、用足し後は専用口から出る仕組みで見張り人つき、デパートでは、入口に居座る番人脇のコイン受台<photo J>の小箱にコインく1€を置いて入り、用足し後は自由に出る仕組みで、お釣りのないよういざという時の用意が肝要で、日本とは違うトイレ事情のことを念頭にしての行動が欠かせない。

## ＝見かけたデモンストレーション＝

ドイツに何故に普及しないかと疑問に思っていたことであるが、過日とあるデパートの一角にて、日本製ウォシュレットのデモンストレーションを見かけたが、人だかりは少なく聞いてみると、ドイツでは生活上で必要とするほどのものではない、無駄なものとの考え方から、大半が見向きもしないとのこと。日本人的感覚では、便利なもので一般的需要供給物が、ここドイツ人に連鎖的に普及させるにはいつになるのか、飽くなきメーカーの今後は明日の風光は如何に！

## ＝前2題の補足＝

前述の記載内容の補足。その後新たに目にしたことを2点ほど記すと、一つがトイレ利用で、とある図書館に入ったところ、鍵が掛かっている入れないので使用不可かを窓口で聞いてみると、カウンター上の小箱に男女区別の専用キーが置いてあり、身なりを見ながらの眼でこれを使えと指差ししてもらった。利用

後戸締めして礼を言って返却すると、どういたしましてのにっこり答えで図書館でのトイレキー貸し出しありを知った。

もう一つはかの日本製ウォシュレット。メッセを覗いた折り実物が展示してあり、ここではドイツ人のみのスタッフでパンフレット類もあったが、誰ひとりとして立ち寄っていない淋しい状況を眼にし、ドイツ国民へはまだまだ普及には時間がかかるのかなと思った。

ちなみに携帯電話のことに触れると、10年ぐらい前のことであるが、ドイツ人は、これを持ったとしても電話とメール以外は機能上必要がない、無駄との考えが大半で携帯所持者が少なかったが、初期機種の経年衰退で、今じゃ街中のショッピングセンターには、携帯電話とメールに情報検索機能内蔵のスマートホンはおろか、iPadやIT満載のタブレットの販売専門店が目につき、電車内でもあっちこちの男女が、これらに夢中で手に目にしての普及連鎖のオンパレードで様変わりが著しい。

### ＝屋外ローラースケートパーク、噴水広場＝

メイン川脇の一角には、ローラースケート、スケボー、キックボード、モトクロスなど好きなものを気軽に持ち寄って自由に滑れる、屋外施設「ローラースケートパーク (photo K)」なる遊び場の設備があり、場内ではお互いが、衝突に気を配りあって滑りを楽しむ子供から学童、若者たちでにぎわっており、中には場内難所をすいすいの技を競い合う上級業師も交じっていて、立ち寄って見入る外野席の人達と共に目を奪われた。

また、ドイツの街角には、ミニ広場が点在し、少し広めの場所には噴水の仕掛け (photo L) がしてあるところもあり、ここでは、タイマーセットの水の吹上りの中に飛び入って楽しむ幼児から学童たち、周りを取り囲んで涼の一時を過ごす老若男女を目にするのも一つの光景である。



〈大型デパートのトイレロ〉 J  
カメラを向けたら番人は隠れてしまった



〈ローラースケートパークの様子〉 K  
・周りの交錯に気配りし合間を素早く滑る  
(不注意事故の害は双方が自己責任を被る)  
・お椀状の上級者用滑りゾーンも隣接する

### ＝学童期学校の警備＝

近くに学童期に通う学校があり、眼に止まった大きなことは、開校日は、校舎を囲む仕切りフェンスの校門口、校舎口、教室が何人も常時出入り自由で、警備要員なし、防備なしの在り様にはびっくり。学校の周りは、誰彼となく人影はまばらながら、近くにはマーケットやトラム停があり、往来は絶えない立地がそうしているのか。学校は聖域とする国家なのか。

日本では、かの事件以来、学校の囲いが一層嚴重に防備され、登下校時は校門での警備が強化され、関

係者以外は一斎シャットアウトの出入り禁止処置が通達されたが、元来ドイツの治安は、ヨーロッパ EU 圏ではナンバーワンとされるものの、同様な事件は皆無なのか、安全面の無防備さは日本とはかけ離れている。

## ＝日本では見かけない道路工事の様子＝

ここドイツでの道路交差点での歩道を含むプラッツ（広場）の改良工事中の状景を見かけたが、交差点へ向かう歩道が工事区域に差し掛かると、行き止まりとなり、ここへはバリケード（夜光式でもなく夜間注意点灯式でもない）が乱雑に車道にはみ出して並べられ、通行者への誘導がなく車道を歩いて行くしかないのに人は平気、交通整理要員無人の仮設材配置<photo M>での工事には驚いた。

日本では、例えば道路上に作業用車両を置いてだけでも、通行者に対する交通要員旗振りでの安全誘導、いかなる道路工事も事前に道路管理者への歩車道占用と所轄警察署への道路使用での規制要領等を整えた両協議書の提出で OK が出来ないといふと工事に着手できないが、工事エリアの仮設対策に関しての法律規定は過剰なのか、人、車交通の安全策無視でお構いなしとは法律重視の国らしからぬ見識にあきれた。



〈街角の噴水あるミニ広場で過ごす人達〉 L  
・子供たちの噴水内での水浴びとベビーカー  
・通りの両側はアパートが並び高さが揃っている  
（かすか最奥右手に見えるのはオフィスビル）



〈工事中の交差点での仮設材の設置状況〉 M  
バリケードで歩道は遮断され車道内にもはみ出して  
いて人の姿はないが車道内歩行でも平然な様である

## ＝神様は人種差別をした？＝

自然的なもので日本にあってもドイツにないものと言ったらナンだ。さて何でしょう。思いつくまま記してみると、気象現象、地形立地が大きく違う点が挙げられよう。

先ず気象では、台風がなく、にわか雨があっても長雨がなく、地形では地震がなく、山、川が少ない。このため、豪雨による土砂災害、河川の増水氾濫、堤防決壊の浸水、竜巻、地震災害、津波、火山噴火災害、山の遭難などなど、生活上でこれらに対する遭遇、避難警戒情報や実際の避難勧告が背中に皆無で、これらのニュースは零、何も気にしないで日々を過ごせるとは、この享受がドイツと日本の人々に及ぶことの是非、この世で居住環境がこうも違っていいものか、これは明白な日本人とドイツ人への人種差別ではないか。神様は、天地を分け隔てなく同じもので与えてくれなかったものである。

ここでスイス、イタリア、ドイツ、フランス、オーストリア、スロベニア6か国に跨る、アルプス山脈のことに触れると、ヨーロッパの多数の河川の水源地となって、ここから流れ出て大河川となったドナウ川、ライン川、ローヌ川、ポー川は、それぞれ黒海、北海、地中海、アドリア海へと注いでおり、ドイツ国に流れるドナウ川、ライン川は、昔から河川交通の要衝として生活に寄与した重要な川で、過去において、ライン川上流では、1860年頃より洪水軽減と内陸舟運のための河川整備が行われ、1930年頃には水力発電と内陸水運の整備も行われた記録がある。

ついでにもう一つ、神様が自然的なもので、日本にもドイツにも与えたものと言ったらナンだ。さて何でしょう。それは、日本ほど豊富ではないが、人々へ心身共に癒しをもたらす温泉が挙げられる。

ドイツの温泉地は、ヴィスバーデン（フランクフルトの州都〈ヘッセン〉）、バーデンバーデンが温泉保養地として名高く（バーデンとは入浴の意だとか）、ここでは水着をまとわない老若男女が、平気で混浴を楽しんでいると聞いたが、恥ずかしさは頭から何処かに抜けて、異様ではない当たり前堂々の動物の世界なのか。この場に浸る人間様の感覚はわからないままである。

## ＝滞在中に購入した日常チケット＝

前述の当該チケットの購入は、65歳以上向けのフランクフルト市内網域①と同市外都市網域②がセットになった、1か月定期券で配備された交通機関（市バス、市電、地下鉄、近距離鉄）が自由に何回でも使えるもので、これ1枚〈約68ユーロ〉を購入した。（東京に例えると、①が23区内域、②が都下、川崎・横浜市、船橋・千葉市、秩父・さいたま市域ぐらいか）

利用条件は、月～金 一人で①が終日使用可（19時以降は二人で使用可）、土～日 二人で①②が、終日使用可となっているもので、日本と同じように高齢化が進むドイツでは、お年寄りが自由気ままに中心街や郊外を跨ぐ健康施設、買物やイベントなどに気軽に出かけて道中を楽しむことができる、気配りあるチケットサービスのシステムの一つでもあらうと思われる。

ある時々であるが、乗車中に検札官（3人グループ）による抜き打ち検札にあったが、定期券を提示しようとしたら即座にOK、無賃乗車を見つけられた場合、普通料金の60倍にあたる罰金を科せられるとか。改札のないドイツの交通機関利用の際の切符の所持は、法律を守ることを極度に重視するドイツ人の国民性で当然の義務というわけで、捕まるのはたいてい外国人あるそうである。

滞在中のこのチケットの情報を得ての活用は、日々の行動範囲が広がり、楽々大助かりであった。

## ＝改めてのドイツ人の気質＝

はじめに理屈ありきで、誰であろうと態度や決定が理屈に合っていないと思った時には文句を言わないで黙っていると、相手に同意したととられてしまう。自分の都合だけでものを考えず、周囲に気を配ることが美德とされ、尊重される国 日本、この社会から180°異なる「自分本位性」の国 ドイツ。ドイツ人はみんなとにかく自分の立場を主張するのがうまい。理屈で相手を説得できたものが勝なのだ。

日本では、特に年上の人に対して話し合いの中で理由を聞くと、批判をしていると勘違いされて相手が気分を害してしまうことがあるが、ドイツの会話では、だれかれ構わず相手に理由を尋ねることは当たり前で、それもなるべく公の場で不満や意見をさらけだして、素直に問題点を話し合おうとする傾向が日本よりは強く、そのまま泣き寝入りで相手に対して何かを根に持つという日本独特の感情は少ないと云われる。

多くのドイツ人は、個人的な感情を交えずに客観的に議論しようとするので、意見が食い違うことをそれほど恐れない。むしろ違う意見を対立させることによって、新しい考え方を生み出そうという国民性である。了

